かながわ歴史教育を考える市民の会　たより

しゅうまい

かながわ歴史教育を考える市民の会
〒235-0036
横浜市磯子区仲原1－1－28
労働総合センター内
TEL045-773-4465/Fax045-774-8075
http://www11.ocn.ne.jp./~reksimin/
No. 50　2011 年 5 月29 日

県教委への「日本史必修」に伴う独自教材の使用と記述内容についての申し入れ・回答交渉

—2011/04/04（月） 神奈川県教育委員会（県住宅供給公社ビル）—

かながわ歴史教育を考える市民の会が昨年12月18日に提出した「日本史必修」に伴う独自教材の使用と記述内容についての申し入れ　に対する回答交渉が、4月4日に県教育委員会で行われました。市民の会は6人が参加、県教委は高校教育指導課の熊坂グループリーダーと中島指導主事が対応しました。

冒頭、市民の会事務局長から回答の遅れについて抗議した後、県教委の回答を受けました。回答書には申し入れに対する具体の記載が無かったため、市民の会から重点課題について見解と対応を迫り、約 2 時間にわたって意見交換を行いました。当初「県教委で決定したこと。内容についてはコメントできない」との態度でしたが、申し入れの目的が「改善」にあること、有償の教材について県教委として責任があるとの認識から、後半は内容に踏み込むことができました。もう一つの大きな目的であった「独自教材使用義務化の撤回」については平行線のままでした。市民の会からは、今後の本格実施に向けて、今夏に行う予定の「試行校意見交換」の内容や各団体の申し入れ内容等の一覧をホームページ上で表示したり、パブリックコメントを実施することなどを提言しました。最後に、震災で 100 人不足しているといわれる東北地方の教師不足に、神奈川県としても支援策を講じるよう付言して終了しました。申し入れ書で指摘した内容以外にも、誤字を含めて、検定を受ければ必ず修正となる部分も多数あることから、市民の会では引き続き「独自教材義務化問題」にとりくむことにしています。（申し入れ・回答文は別添）

かながわ歴史教育を考える市民の会が「３．１学習会」を開催

かながわ歴史教育を考える市民の会は3月１日、横浜市内で、明治大学情報コミュニケーション学部准教授の須田努さんを講師に招き、「江戸時代民衆の朝鮮・朝鮮人観-歴史認識から形成される他者認識の陥穽」と題する学習会を開催した。全体の参加者は 57 人だった。

1919 年3月１日に、当時日本の植民地だった朝鮮で独立宣言が発表され、デモ行進が行われた。「3・1独立運動」は3か月に渡り各地に及んだ。「市民の会」はこのことを記念し、毎年この時期に、日本と韓国・朝鮮との間の歴史を学ぶ集会を開いている。

主催者あいさつで宇野共同代表は、「朝鮮半島は日本と地理的に近く、古くから交流があった。しかし、秀吉による朝鮮出兵や鎖国、征韓論に韓国併合など、振り返れば不幸な歴史があった。改めて歴史を学ぶ必要がある」と述べ、集会の意義を強調した。

続いての講演で須田さんは、江戸時代の民衆の朝鮮観について、朝鮮通信使の来日や、浄瑠璃・歌舞伎などの芸能作品とも絡めて解説した。当時人気のあった芸能作品は当時の時代を反映し、民衆の嗜好とも合致しているので、時代の実相を研究する上での良い資料となりうる。

朝鮮通信使は、徳川幕府成立直後の 1607 年から 1811 年まで、300～500 人規模で合計して 12 回来日し、多くの民衆とも交流した。

エリート官僚でもあった彼らは、それ以前の秀吉による朝鮮侵略にも関わらず、「友好善隣」のため来日した。しかし本来の目的は、「野蛮な国＝武家社会の日本」を教化し、平和な国にし、北方の脅威となっていた女真（後の清）との両面対決を避けるということであった。

18 世紀前半、通信使が大坂（大阪）へ訪問する以前、当地では近松門左衛門や紀海音による浄瑠璃作品が人気を集めていた。そこでは「太閤秀吉」や「神功皇后」による朝鮮侵略が武勇伝として演じられた。近松や海音は、原典（元ネタ）として小瀬甫庵の『太閤記』や『日本書記』などを利用したようだが、そもそもこれらは歴史的観点から見て創作が多いとされている。

その結果、民衆の中では、①「二度」敗れ、日本の奴となり朝貢する朝鮮、②武の日本、柔弱な朝鮮、③神国日本、蛮族朝鮮、などのイメージが醸成された。しかし通信使が直接に民衆と交流していたので、他方では文化的な畏敬の念もあった。

18 世紀後半、浄瑠璃に加えて歌舞伎でも朝鮮・朝鮮人が多く描かれた。とりわけ「天徳物」といわれる作品は大ヒットした。しかしながらこのことにより、①武威の日本、武力に劣る朝鮮、②朝鮮人は得体が知れない、③朝鮮人は日本に対して恨みを持つが、謀反を起こしても失敗する、といったイメージが固定化した。

ただし、このころまでは、通信使がまだ江戸まで来ており、民衆の目にも触れていたので、憧れを持って接待されることも多かった。全国では朝鮮にちなむ祭りがあった。岡山県牛窓町や三重県津市では、朝鮮人のような格好をして踊る祭りが今も残っている。

19 世紀に入り、通信使が来日しなくなると、朝鮮への認識はさらに混乱する。鶴屋南北の歌舞伎は近松や海音を底流とし、それなどによって、民衆のなかに、「三韓人は日本の犬」「ちく（畜）生道」といった朝鮮に対する蔑視意識までも形成されていった。

そして幕末、吉田松陰の征韓論である。松陰は日本の武威が「黒船」によって崩壊したと見た。幕府を倒すことを考えたが、欧米には勝てないことを悟った。しかし朝鮮には勝てるとし、その戦いを通じて日本は結集すべきと展開した。

明治に入り、松陰のこの思想は多くの民衆に消極的ながらも肯定され、後の朝鮮侵略を合理化していった。

須田さんは最後に、「他者への接触がなくなると認識はおかしくなる。他者への関心が低くなったときは危険だ。常に歴史を学び返すことが大事」と締めくくった。

（報告：かながわ歴史教育を考える市民の会
世話人　播磨谷真）

かながわ歴史教育を考える」市民の会総会

☆日　　時　　総会　9 月 16 日（金）　18：15　開会

☆場　　所　　かながわ労働プラザ　5・6・7会議室

記念講演　　講師　未定

-